「典礼は教会が目指す頂点であり源泉である」

（洗礼準備講座　18.3.18）

1. 祭司職を実践する典礼活動

神の民である教会は、本来的に祭司的な典礼共同体であり、キリストが主体である典礼行為に、共同体ぐるみであずかるのである。なお、「洗礼を受けた者は、新に生れ聖霊の塗油を受けることによって、霊的な家および聖なる祭司団となる。・・・信者の共通祭司職と、役務としての、あるいは位階的祭司職とは、段階においてだけでなく、本質において異なるものであるが、相互に秩序づけられ、それぞれ独自の方法で、キリストの唯一の祭司にあずかっている」（『教会憲章』10項）。

また、「典礼はまさしくイエス・キリストの祭司職の行使と考えられるので、典礼において、人間の聖化が感覚的なしるしによって示され、それぞれのしるしに固有の仕方で実現される。・・・それゆえ、典礼祭儀はすべて、祭司キリストとその体である教会のわざであるので、他にまさる聖なる行為であり、教会の他のいかなる行為も、同等の資格や程度をもってこれに匹敵する効力をもとことはない」（『典礼憲章』7項）。

2．信者の典礼への意識的かつ積極的参加

「行動的参加を促進し明確にするために、公会議の意向に従って、会衆の応唱、答唱、詩編唱和、先唱、聖書の歌、更に、行為や動き、動作を大切にし、適宜にためたれるべき聖なる沈黙を命じている」（『あがないの秘跡』39項）。

「『参加』ということばは、祭儀の中で単なる外的活動を指すだけではないことをはっきりさせる必要があります。・・・そのため、わたしたちが祝う神秘と、その日常生活との関係とを、深く自覚することから出発しなければなりません。・・・

あらかじめ身分の生活を吟味せず、形式的な態度で感謝の祭儀にあずかるなら、行動的な参加は望めません。たとえば、少なくとも典礼開始前の数刻は精神の集中と沈黙にあてること、飲食を控えること、必要な場合は、ゆるしの秘跡を受けることによって、こうした内的な準備を整えることが可能になります。・・・教会生活への参加には、社会にキリストの愛もたらす宣教の務めがふくまれます」（『愛の秘跡』52,54,55項）。

「典礼刷新の原点・ミサを学ぶ」

(典礼研修資料)

今、私たち教会に求められていること

教会の歩みにおいて、最も重要な改革と刷新に踏み切った第二バチカン公会議から、すでに五十年以上を経た今、刷新の中心にあった典礼について改めて学び直す必要がある。なぜなら、刷新は継続されてこそ実現するからである。

1．典礼改革から始まった第二バチカン公会議

公会議の初穂として、**1963年12月4日**に教皇パウロ６世と諸教父（参加司教）によって署名された**『典礼憲章』(SACROSANCTM CONCILIUM)**が目指していること。

(1)　キリストの祭司職を教会によって行使する典礼の本質の再確認（7項)。

(2)　典礼の重要性の強調「典礼は教会活動が目指す頂点であり、教会のあらゆる力が流れ出る泉である。」(10項)。

(3)　すべての信徒が典礼に充実した、自覚をもって、積極的に参加すること。

(4)　個人的な祈りに優先させる教会共同体全体の奉仕としての典礼の促進（26-27項)

(5)　それぞれの文化と霊性に適した典礼の創造（37-38項)。

2.『典礼憲章』によって刷新されたミサ

典礼改革の中心であるミサの刷新に示された、注目すべき特徴。

(1)　復活秘義がミサで現在化される（47項)。

(2)　「共にささげるミサ」における信徒の積極的参加の促進「この秘義をよく理解し、聖なる行為に、意識的に、敬虔に、また行動的に参加し、神のことばによって教えられ、主のからだの食卓において養われ、神に感謝をささげ、ただ司祭の手を通してだけでなく、信徒も司祭と共に清い供え物を奉献して、自分自身を奉献することを学ぶ。」(48項）ロマ書12, 1を参照。

(3)　「ことばの典礼」の重要性の再確認:「信徒に神のことばの食卓にある富を豊かに与えるために、聖書の宝庫を今まで以上に広く開かなければならない。そのために、数年を一定の周期として、聖書の重要な個所が会衆に朗読されるべきである。」(51項)

(4)　典礼聖歌、聖書朗読、パンとぶどう酒の奉納、「共同祈願」での信徒の役割の強調とそのための養成の必要性（114項）:「侍者、朗読者、解説者、聖歌隊に属する者も、真に典礼の奉仕を行う。したがって、自分の役割を、この偉大な奉仕にふさわしい、また、神の民が当然期待している誠実な信仰心と秩序をもって果たさなければならない。そのための養成が必要である。」(29項)

(5)　両形態（パンとぶどう酒）による聖体拝領の可能性（55項)。

3. ミサの構造

(1) 全体の構造

a. ミサとは：「主の晩さん、またはミサは、聖なる集会の儀、すなわち『主の記念』を祝うために、キリストのみ名において司式する司祭を座長として、一つに集まった神の民の集会である。…十字架に奉献が続けられるミサの祭儀において、キリストは、その名のもとに集まっている（マタイ 18,20）集会の中に、奉仕者の中に、みことばの中に、実際に、またパンとぶどう酒の形態のもとに現存している。」（『ローマ・ミサ典礼書総則』7；『典礼憲章』7）

b. ミサは二つの部分から成り立っている。「ことばの典礼」（第一朗読から共同祈願まで）と「感謝の典礼」（奉納の準備から拝領祈願まで）であるが、互いに密接に結ばれており、正に一つ礼拝祭儀を構成している。
なお、祭儀を開始する「開祭」と、祭儀をしめくくる「閉祭」も初めと終わりに結び付いている。（『総則』8）

(2) ミサの種々の要素

a. 神のことばの朗読とその説明

聖書が教会で朗読されるときには、神ご自身がその民に語られ、キリストは、ご自身のことばのうちに現存して福音を告げられる。したがって、神のことばの朗読は典礼の最も重要な要素であり、敬意をもって聴かなければならない。そして、典礼行為の一部である説教によって、みことばの効果は具体化する。

b. 司祭が担当する祈願とその他の部分

「感謝の祈り」（奉献文）は、祭儀全体の頂点と言える。次に、集会祈願、奉納祈願、拝領祈願をキリストのみ名によって司式する司祭が、聖なる民全体と会衆一同の名によって父なる神にささげる。だから、「公式祈願」と呼ばれる。神のことばを告げること、終わりの祝福を与えるのも座長である司祭の務めである。

c. 祭儀におけるその他の式文

ミサの祭儀は、本性上、**共同体的性格**をもっているので、司式者と信者会衆との間に交わされる対話や応唱などは大きな力をもっている。司祭の挨拶や祈願にたいする信者の応唱と答唱は、共同体全体の行為を明らかにし，育むものであり正に行動的参加に他ならない。また、回心の祈り、信仰宣言、共同祈願、主の祈りなどは、会衆が行動的に参加するために大切な部分である。

d. 歌の重要性

主の再臨を待ち望みつつ一つに集まるキリスト信者は、詩編、賛歌、霊歌を共に歌うように使徒から勧められている（コロサイ 3,16 参照）。

e. 動作と姿勢

すべての参加者が共通の姿勢を守ることは、集会の共同体性と一致のしるしである。それは、参加者のまさに心の表現であり、同時に心を育むのである。パンとぶどう酒の聖別と奉挙のときは、日本では跪く代わりに合掌して深く礼をする。またその他の動作も、それぞれ定められた規定に従って美しく行われるようにする。

f. 沈黙も典礼への積極参加である

聖なる沈黙も、祭儀の一部として大切にしなければならない。たとえば、回心の祈りのときと祈願への招きの後には各人が沈黙の内に祈る。また、聖書朗読や説教の後には、聴いたことを黙想し、聖体拝領後には、心の中で神に感謝し賛美して祈る。

4. ミサの各部

(1) **開祭：開始、導入、準備の儀式であり、一つに集まった信者が一致し、神のことばを相応しく聴き、「感謝の祭儀」を行うように自らを整えるためである。**

入祭：会衆が集まってから、司祭が奉仕者と共に入堂するとき、**入祭の歌**を歌い、会衆の一致を促し、思いを典礼季節と祝祭の神秘に導入し、司祭と奉仕者の行列を飾る。

祭壇への表敬と会衆への挨拶：祭壇の前に着いたら、司祭と奉仕者は祭壇に合掌して深く礼をする。適当であれば祭壇に献香する。そして、司祭は内陣に昇り、聖櫃に侍者共に一礼し、さらに祭壇に合掌して表敬する。

また、朐子者は、朗読聖書を朗読台に広げ、他の奉仕者と共に席に戻る。次に、司祭は集まった共同体に挨拶し主の現存を示す。「主は皆さんと共に」、会衆は「また司祭と共に」(叙階の秘跡でいただいた聖霊の力と助けによって適切に奉仕ができますように)と答える。

回心の祈り：短い言葉で、その日のミサを説明することができる。その後、回心の祈りを共同体全体で一般告白をもって行い、ゆるしのことばによって結ばれる（赦しの秘跡にはならない)。

あわれみの賛歌：「キリエ・エレイソン」はギリシャ東方典礼ですでに四世紀から、連願のなかで嘆願に対する会衆の応答であった。

栄光の賛歌：中世初頭には、「テ・デウム」と同じように祝日の歌として用いられ、ローマはすでに六世紀以前から主日と祝祭日のミサに採り入れた。聖霊の内に集う教会は、この歌で神なる父と子を讃える。但し、待降節と四旬節には歌わない。

集会祈願：会衆に祈りを勧める。そして各自沈黙の内に祈り、自分たちが神のみ前にいることを意識し、自分の願いを思い起こす。それから、司祭は「集

会祈願」によって祭儀の性格を現し、聖霊において、キリストをとおして、父なる神に向けて祈りをささげる。皆の祈りをまとめるということから一般的内容になってしまう。できるだけ、日々の生活からあまりかけ離れないようにすべきである。司祭の祈りのスタイルは手を広げオランス（初期キリスト教時代の祈る姿勢）の形をとる。

会衆は、この嘆願に心を合わせ「アーメン」と答え自分たちの祈りとする。

（**Amen**：ヘブライ語ですでに旧約聖書の中でも使われていて、会堂の礼拝では会衆の同意と確認の応答であった。新約聖書ではイエスご自身が特に重大な宣言をなさるとき、冒頭で二度繰り返して言われた。（ﾖﾊﾈ 5,19,25 ；ﾏﾀｲでは一回：5,18）祈りの終わりに、会衆は「アーメン」によって信仰告白を（黙示 3,14 参照：イエスご自身が神的応答としてアーメンである）キリストに倣って行うのである。

(2)　ことばの典礼

この典礼は聖書朗読とそれについての説教と詩編の歌によって構成される。正に、みことばによって神はその民にそのときその場で直接語られ、あがないと救いの秘義を解き明かし、霊的な糧を豊かに与えられる。また、キリストご自身は、ご自分のみことばによって信者の間に**現存**される。この神のことばを会衆は歌で応答しながら自分のものとして受け入れ、信仰宣言によってそれを表明する。

聖書朗読：聖書朗読によって神のことばの食卓が信者に備えられ、聖書の宝庫が開かれる（**『典礼憲章』51 項）。**朗読が終わると、会衆は答唱する。日本では、朗読者は聖書に一礼し、奉仕者が「神に感謝」と答える。第一朗読の後、みことば味わうために少しの間をとり、そして**答唱詩編を歌う。**

アレルヤ唱：会衆は福音で語られる主に、この歌の歓呼で挨拶し信仰を表明しお迎えする。（詩編　111-117；黙示 19,1-10 参照）キリスト教の典礼では、かなり早い時期から特に復活節に喜びと賛美を表すために歌い始めた。

（Alléluia: ヘブライ語：halelou-iah; hillél 賛美せよ＋iah　主を）

福音の朗読：福音は助祭、あるいは他の司祭がいないときは、司式司祭が朗読する。初めに司祭は、親指で福音書と自分の額、口、胸に十字架のしるしをする。また、終わると福音書に表敬し「**キリストの賛美**」と唱え、会衆も「**キリストに賛美**」と応唱する。

このように福音を告げ知らせるために選任された奉仕者は、祝福あるいは祈りによって自らを準備し、会衆はキリスト自身が**現存**され自分たちに今、語っておられることを応答によって確認し、公言し起立して拝聴するのである。

説教：説教は典礼の一部であって、大切な役割である。それは、キリスト者

の信仰生活の糧に必要だからである。内容としては、朗読された聖書、もしくはその日の典礼の解説となり、しかも実際の生活に生かすことができるものが求められる。

信仰宣言：会衆が聖書朗読と説教を通して聴いた神のことばに共鳴し、応答し、やがて始まる「感謝の典礼」を行う前に信仰の規範を思い起こすためである。日本では、通常洗礼式の信仰宣言が使われる。

共同祈願: この「信者の祈り」おいて、会衆は、自分の祭司職の務めを実行して、すべての人のために祈る。意向は、通常以下の順序で行う。イ　教会の必要のため。ロ　国政にたずさわる人々と全世界の救いのため。ハ　困難に苦しむ人々のために。ニ　現地の共同体のために。ただし、堅信、結婚、葬儀においては、内容を考慮し意向の順序を決めることができる。この祈り全体を、それぞれの共同体が準備することが望ましい。

(3) 感謝の典礼

最後の晩餐で、主は「過越のいけにえ」と会食を制定され、ご自分のなさったことを**記念**として行うように教会に託されたことによって、十字架上での主の奉献が典礼において絶えず**現存（現在化）**するのである。

十字架上でのイエスの死は、旧約聖書で示されているような伝統的な＜いけにえ＞ではなかった。実に、主ご自身がささげる本人であり、苦しみと死をすすんで受け止められたのである。(ｲｻﾞﾔ 53,2-10；ﾖﾊﾈ 10,17-18 参照) だから、イエスは、十字架上でご自分を奉献なさることで、御父に最高の賛美をささげ、世界のための救いのみ業を遂行なさったのである。このキリスト奉献は、教会の典礼において常に**現在化**され継続されている。(**『典礼憲章』47 項**)

供え物の準備：

この準備が典礼の中に取り入れられたのは、東方典礼では四世紀である。まず、感謝の典礼の中心である祭壇、すなわち主の食卓の準備をするため、コルポラーレ、プリフィカトリウム、ミサ典礼書、カリスが祭壇に置かれる。**奉納行列**：西方典礼では会衆の参加が大いに強調されたので、行列になった。十一世紀以降からは、次第に他の供え物はすべて献金にとって代わられた。信者がパンとぶどう酒、さらに献金をささげるために祭壇の前まで運ばれる間、**奉納の歌**が歌われる。献金は祭壇以外の適当な場所に置かれる。

奉納祈願：

供え物の奉納とそれに伴う儀式では、水をぶどう酒に加えるが、キリストの受肉で始められたことがこの秘跡によって成就しますように、またわたしたちが人となられたお方の神聖に与ることが出来るように祈り、さらに、司祭と共

に祈るようにとの招きと「奉納祈願」によって、**感謝の祈り**の準備が整う。

感謝の祈り（奉献文：l'Anaphore）

ここで、祭儀全体の中心であり頂点である**感謝の祈り（奉献文）**、すなわち感謝と聖別の祈りが始まる。この祈りの意義は、信者の集まり全体が自らをキリストに結び合わせて、神の偉大な業を宣言し、ともに奉献することにある。

感謝の祈りの構成：

イ　感謝（特に叙唱）：ここで神を賛美し信者共同体を**前に**して、**公に**告げ知らせるという二重の意味で「前で述べる」ことになっている。

ロ　応唱：全会衆が、**感謝の賛歌**イザヤの体験を素材にしているが「ｲｻﾞﾔ6,2-3
参照)、会衆によって歌われるミサ曲としては最も古い。

ハ　聖霊の働きを求める祈り（ｴﾋﾟｸﾚｲｼｽ）によって人々の供え物がキリストのからだと血になるよう、また、これを拝領することによって、汚れのないいけにえが、それに与る人々の救いになるように祈る。

ニ　聖体の制定の叙述と聖別：キリストのことばと行いによっていけにえがささげられる。それは、キリストご自身が最後の晩餐において制定されたもので、パンとぶどう酒の形態のもとに、ご自分にからだと血をささげ、私たちが食べ、飲むように与えられ、同じ秘義（神秘）を永続させるように命令されたのである。

ホ　記念（アナムネシス）：教会は使徒を通して主・キリストから受けた命令を実行し、キリスト自身の記念を行い、特に、その幸いなる受難、栄光ある復活、そして昇天を思い起こす。

さらに「キリストの御からだと御血に　ともにあずかるわたしたちが　聖霊によって一つに結ばれますように。」と「交わりのｴﾋﾟｸﾚｲｼｽ」が加わった。

ヘ　奉献：ホスチアを持ち上げるのは、元来供えの作法でありユダヤ人の食事の儀式に由来する。聖霊にうちにあって、汚れのないいけにえを御父にささげる。同時に、自分自身をもささげる。

ト　取次ぎの祈り：生者と死者を問わずそのすべての構成員のために、奉献が行われることを祈る。

チ　結びの栄唱：これは古典的なキリスト教の祈りの基本定式であり、神の栄光への賛美が表され、会衆は応唱によってこれを確認して結ぶ。

交わりの儀：感謝の祭儀は過越の会食であるから、主の命令に従って、主のからだと血は、心の整った信者が霊的食物として拝領する。これによって、主と交わりまたお互いが交わることによって真の一致を体験する。

イ　**主の祈り**：この交わりのための特別な祈りとなる。教父の解釈によれば「日ごとの糧」に聖体が暗示されている。また、罪から清められることも願う。この祈りに続く「副文」は主の祈りを発展させたものである。

ロ　平和の挨拶：昔から平和の接吻が行われていたが、男女別に分かれていた。全教会と人類家族全体のための平和と一致を願い求め、相互の愛を表すのであって、普通の挨拶ではない。日本では、合掌して「主の平和」と唱えながら相互に一礼する。

ハ　パンの分割：使徒時代にはミサの名称であった。（使徒 2,42 参照）これは特に同じ一つの命のパンを分かち合うことによって、皆がキリストの一つからだになることを表す。（1 コリント 10,17 参照）同時に、最後の晩餐のときに示されたようにイエスの死を象徴している。

ニ　混和：パンの一部をカリスの中に入れる。歴史的には、ローマで教皇の司式するミサに参加できない信者のミサが、それぞれの教会でささげられたときに聖体の一部を、それらの教会に配り一致を表していた。また、主のからだと血が一体となったことをも示している。

ホ　平和の賛歌：パンを割き、パンの一部をカリスに入れる間に、平和の賛歌が歌われる。

ヘ　司祭の個人的祈りの後、拝領する聖体を信者に示し、拝領の準備を促す。

ト　信者は聖体の拝領によってキリストにおける真の交わりを体験する。

チ　聖体拝領の間に、拝領の歌が歌われる。この歌によって、霊的一致を表し、心の喜びを示し、拝領の行列をより兄弟的なものにする。

リ　拝領の後、しばらくの間沈黙のうちに祈る。また、賛歌などを歌うことも出来る。

ヌ　拝領祈願によって、司祭は祝われた秘義の実りを祈り求める。会衆は「アーメン」の応唱によって自分たちの祈りとする。

(4) 閉祭

イ　司祭の挨拶と派遣の祝福：

ロ　解散：各人が共に主を賛美し、たたえながら、自分の仕事に戻るよう集会は解散される。

結び：ミサはイエスご自身が教会によってご自分を御父に奉献して賛美し感謝する祭儀であるから、「感謝の祭儀」（Eucharistie）と言える。